

## 5 産業と民俗～農村のくらしと文化～

那須塩原市の市域の約半分は、那須扇状地の扇頂部から扇中部に当たり、古来より扇頂部付近と扇端部に近い湧水地付近や川沿いの地域に村落が発達していましたが、大部分は田畑に適さないやせた土地でした。

そのため、開拓地の現金収入の手段として黒磯地区・狩野地区ではタバコが、西那須野地区では養蚕が特に盛んでした。また、那須地方は古くから馬産地として世に知られており、農耕馬や軍馬の産地として第2次世界大戦終結まで日本の主要産業に位置付けられていました。

「那須おろし」や「高原おろし」とも呼ばれる、那須岳や高原山から吹き降ろされる冬季独特の強風から家屋を守るため、屋敷林や土塁などが設けられました。「ヤウラ」と呼ばれる防風林を備えた家並みが街道沿いに並ぶ列状集落は、この地ならではの特徴的な景観といえます。

そして、扇状地特有の生活風土の中、古くから集落を形成していた高林地区には農耕儀礼として発展した獅子舞や念仏舞が、また、塩原地区には大田原藩とゆかりがある城鉾舞などの特徴ある民俗芸能が伝承されています。いずれの民俗芸能も、その地域の歴史と文化に根付いた貴重な遺産として保存していく必要があります。

### ●那須野が原の農業～畑作から米どころへ～

市内の平野部は、北西部に広大な山岳地帯(標高 1,000m 以上)を抱え、北を高久丘陵、南を喜連川丘陵に囲まれた盆地性の扇状地となっており、北東を那珂川、南西を箒川に挟まれた市域の平野部のほとんどが扇頂部から扇中部に位置しています。

こうした扇状地特有の自然風土の中、南東部の湧水点及び山地端部に古くから集落が営まれてきましたが、小規模な水田経営が行われたと考えられます。江戸時代からは、本格的な水利開発で水田面積も広がっていましたが、多くは畑地だったようです。

水田面積が増加したのは、大正年間に始まり戦後に飛躍的に拡大した地下水の利用によるもので、昭和 42 年(1967) 2 月着工、平成 7 年(1995) 3 月完了の「国営那須野ヶ原総合開発事業」により大規模な土地改良事業が行われました。



現在の農村景観



農地を流れる用水



乃木希典那須野旧宅敷地内の  
覆い屋付井戸及び揚水ポンプ

## 葉タバコ

八溝山麓の山村地帯は、古くから下野タバコの主要生産地として知られており、県内では、旧那須郡の馬頭付近での栽培が盛んで、「大山田葉」が良葉として評判でした。江戸時代初期には那須地区でも葉タバコ栽培が伝わったようです。鍋掛・東那須野地区で生産された葉タバコは、一般に「原方物」と呼ばれ「光沢佳ナラズ葉脈粗大香気ニ乏シク且火付宜シカラス」（『大田原煙草調書』）と評価は低いものでした。明治時代になると、大田原に専売所が設けられ、西那須野地区の旧狩野村でも栽培が盛んになっていきました。槻沢地区には「煙草大神」（昭和 15 年（1940）建立）という碑が残っており、往時の葉タバコ栽培の隆盛を物語っています。

葉タバコの栽培は戦後も拡大しましたが、ピークとなる昭和 38 年（1963）を境に作付面積及び耕作者数が半減し、昭和 40 年代の「開田ブーム」による米作への転換のため、さらに減少の一途をたどりました。

## 一大生産地であった木炭

大農場の山林事業の一環あるいは、農家の副業として大量の薪炭の生産が行われていました。また、明治 18 年（1885）の鉄道の開通を機に黒磯駅前には多くの薪炭商が開業して、「薪炭の町」と呼ばれるほどのにぎわいを見せました。大正年間の黒磯駅での木炭貨物発送数量でも 16,000 トンを超える取扱高でした。木材も大正 3 年（1914）の 4,000 トンから 5 年後の大正 8 年（1919）には 13,000 トンを超えて 3 倍強となり、拡大する東京都心の需要に応じてきました。

県内から出荷される木炭は「野州炭」と呼ばれ、北那須地域はその主要な産地として不動のものでした。特に、広大な山林を占める高林地区では大正 2 年（1913）には 1,800 トンもの生産を行い、黒磯地区とあわせると北那須地域の 4 割の生産を行っていました。

戦後では、昭和 32 年（1957）をピークにその 6 年後には半以下に生産は落ち込み、家庭でのエネルギー需要の変化の中で減退の一途をたどりました。

## ●那須野が原の畜産業～馬産・養蚕・緬羊～

### 馬産

那須野が原は、昔から馬産地として世に知られていました。那須東原は古くは大輪地原という原野であり、これを取り巻く 44 の村々は、長い間豊かな草に恵まれて馬を愛育してきました。

明治期になって牧牛馬畜産会社などが設立され、馬の飼育がますます盛んとなり、明治 23 年（1890）には黒磯の倉光三郎らが豊浦農場に競馬場（現黒磯小学校）を設け、大いに産馬奨励に努めました。大正年間には、それまでの在来馬から洋種を含めた「改良馬」の飼育が盛んになり、後年産馬組合も設立され、日清・日露両戦役により軍の要請も急速に増大し、常に 5～6 頭の馬を飼育する農家は少なくありませんでした。しかし、第二次世界大戦敗戦による軍の崩壊により需要の主体を失い、農耕の機械化と酪農の増大につれ、漸次その姿を消し、昭和 44 年（1969）黒田原を最後に産馬せり市は廃されました。

### 養蚕と製糸業

明治になると、養蚕が現金収入の副業として盛んに行われるようになりました。開拓農場の開墾に際しては、移住者に「天蚕」飼育が奨励されました。また、養蚕の盛んであった長野や群馬からの移

住者により、養蚕技術が当地域にも導入され、養蚕の振興がはかられました。昭和9年(1934)の栃木県統計では、西那須野地区で農家戸数763戸、桑園面積は527.1haとなっており、黒磯・東那須野・高林・鍋掛地区が農家戸数768戸、桑園面積206.5haと農家戸数ではほぼ同じですが、面積が倍となっているなど、とりわけ開拓地において養蚕が盛んであったことが判ります。

開拓地の養蚕は、明治国家が勧めた殖産興業・富国強兵のスローガンと共鳴して、近代日本の経済を支えてきました。

分野	名称
未指定文化財	蚕金神社・養蚕神社・保食神社・農蚕影神社・蚕玉様・煙草大神碑
その他文化資源	天蚕場

### ●本州一の酪農地域～明治の大農場から戦後開拓へ～

明治13年(1880)に三島通庸が発起人となり、牛の飼育を目的とした<sup>きつちようぎゅううしや</sup>茁長牛社が発足しました(茁：動物が成長する様)。500町歩の牧場を持ち「牧牛」繁殖のために、山形・青森・岩手などから和牛を買い入れたほか、西洋種の牛の飼育も試みられました。しかし、牛の飼育は容易ではなく、明治14年(1881)から1年のうちに97頭の牛が病死するなどしており、明治19年(1886)には解散し、初期の畜産・酪農は挫折しました。これとは別に、県営那須農場を引き継いだ豊浦農場(毛利農場)や共墾社が、主に西洋種の牛を50から100頭前後飼育しましたが、明治26年(1893)頃には飼育を停止しています。豊浦農場では、明治29年(1896)以降は綿羊の飼育に移行していたようです。

市内における酪農・畜産が盛んとなるのは、戦後開拓として入植した農家の努力によるものと考えられます。黒磯地区の生乳生産量は、「山麓酪連」の取扱高でも、昭和30年(1955)から昭和45年(1970)の15年間で、当初の246,519kgから9,147,542kgと37倍の伸びを示しています。

現在では、農場数が400戸を超える「畜産の盛んなまち」となっており、農業産出額の70%を畜産が占めています。そのなかでも、特に酪農が盛んで、30,000頭を超える牛の飼育を行っており生乳の産出額は全国で第4位となっています。第1位から第3位が北海道ですが、本州以南においては第1位を誇っています。

### 戦後開拓地

太平洋戦争が終結した昭和20年(1945)8月には、国家再建の一大柱として、食糧増産を目指した開拓事業が計画されます。県内の「北那須地区」はその開墾適地の一つとして選ばれ、旧軍用地であった埼玉飛行場跡や戸田・藤田農場の未開墾地などが、除隊した兵士や満州開拓団の引揚者、農家の次・三男対策として開拓団の入植先となりました。昭和38年までに高林地区に22、黒磯・東那須野・鍋掛地区に13、西那須野に1、塩原に1という具合に開拓地が設定され、併せて1,520余戸、7,800余人、3,200町歩の開墾が行われました。これは県全体の6割に当たります。開拓地はその水利・土地条件や計画により、それぞれ酪農中心型・酪農稲作混合型・稲作中心型など大きく変化していきます。戦後の開拓の歴史が現在の農村風景を作り出してきたといえます。

## ●集落の特徴～日本有数の列状集落と「ヤウラ」～

市内には、道路に沿って農家を中心とした家が列状に並んだ集落が多くみられ、本市の特徴的な景観のひとつとなっています。

列状集落は、旧奥州街道や会津中街道などの街道沿い、江戸時代の用水沿いに多く、特に高阿津用水沿いの集落は、もともと箒川沿いにあった集落が川の氾濫を避けて河岸段丘沿いに移動したもので、上大貫と下大貫は大田原市の上石上・下石上とほぼ一続きとなり、その規模は日本有数と言えます。これらの多くは計画的な集落で、宅地割をしてから家を建てており、一軒の幅はほぼ同じとなっています。

また、市内には〇〇新田という大字名がみられるのも特徴です。これらの地名は黒磯地区に多く、江戸時代初期に新しく開かれた村名が多いのですが、「新田」という地名が残る地区は、近世において新たに屋敷地及び田畑を開発した場所です。

那須扇状地には、那須岳や高原山から吹き降ろされる冬季の強風から家屋を守るヤウラ(屋敷林)が特徴的にみられ、一部には防風林の土盛(土手)などがみられます。ヤウラは農村地域を中心にみられますが、場所により「一面囲い」・「二面囲い」・「三面囲い」などの違いがあり、家屋の立地と卓越風の方向・強さにより選ばれてきたと考えられます。

こうしたヤウラをもつ景観は、住環境の変化などから急速に消えつつあります。

## ■集落景観



箕輪地区（那須疏水北側に位置）



大貫地区



屋敷林



屋敷林 入母屋



木綿畑集落遠景(背後那須岳)





那須開墾社跡の土塁



大山邸跡の土塁

## ●馬頭観音碑～圧倒する石像物～

本市には、「馬頭観音」や「馬頭観世音」と彫られた石仏や観音像の頭上に馬の頭の形が浮き彫りにされた石仏が多く残ります。特に、本郷町の馬頭観世音は、大小 16 基の石碑が那珂川河畔の旧原街道沿いに並んでいます。このほかにも、周辺の石碑を集めて祀った場所が各所にあり、馬頭観音碑も多くみられます。

昭和 45 年(1970)に県教育委員会が実施した調査では、本市は那須町に次いで馬頭観音の数が多く、黒磯、西那須野、塩原地区を合わせた数は 390 基に及びます。

馬頭観音碑の多さは、那須地方において産業としての馬産が盛んであったことと関係があり、繁殖祈願や死んだ馬の供養として建立されたものと思われる。



本郷町の馬頭観世音

## ●地域に伝わる数多い民俗芸能

市内には、風流系<sup>ふうりゅう</sup>三匹獅子舞、または、一人立三匹獅子舞と呼ばれる、雄 2 頭が雌 1 頭を奪いあう様子を演じる獅子舞が多く伝承されています。また、これらの獅子舞は関白流(宇都宮上河内よりの伝承)と文挾流(今市文挾よりの伝承)のいずれかを名乗っています。

歴史的には 15 世紀半ば以降に公家文化や宮中行事が地方に伝わり、舞や風流踊り、綾踊りとして、街道を通って北関東に伝播したものと考えられており、市内では高林地区に多く伝承されています。

獅子舞の多くは 3 月末から 4 月にかけて奉納されることが多く、また、オカメ・ヒョットコの面をつけた滑稽踊りもみられることから、豊作を祈る予祝芸の意味合いが強いと考えられています。

また、箒根地区では関谷や大貫に伝承されている城鉾舞や百村地区の百堂念仏舞等、獅子舞から派生したと思われる民俗芸能や、奥州街道や原街道などの「歴史の道」が伝えた「田植え唄」「もちつき唄」などの民謡や芸能も残っており、地方の風土に深く根付いた地域文化を醸し出しています。

これらの民俗芸能のほかにも、祭礼時の余興としてのお囃子や創作芸能としての和太鼓などが市内各地で保存伝承されています。

#### ■市郷土芸能一覧

名称	備考
百村の百堂念仏舞	国選択無形民俗文化財
関谷の城鞆舞	栃木県指定無形民俗文化財
上大貫の城鞆舞	〃
塩原平家獅子舞	〃
遅沢ばやし	那須塩原市指定無形民俗文化財
西富山の獅子舞	〃
関谷囃子	〃
上塩原源太踊り	〃
上塩原古代獅子舞	〃
三本木の獅子舞	〃
木綿畑新田の太々神楽	〃
木綿畑本田の獅子舞	〃
高林の獅子舞	〃
嶽山箒根神社梵天上げ	〃
臺沼もちつき	〃
那須野ヶ原疏水太鼓	未指定
鍋掛もちつき唄	〃
東那須野おはやし	〃
子ども疏水太鼓	〃
太夫塚八木節笠踊り	〃
つきの木もちつき唄	〃
那須苗取り田植唄	〃
三島お囃子・八木節	〃
大山八木節笠おどり	〃
関谷子供囃子	〃
宇都野子供獅子舞	〃
塩原温泉まつりお囃子	〃
流響塩原太鼓	〃
黒磯巻狩太鼓	〃
巻狩踊りお囃子	〃

## 6 温泉が生み出す文化～信仰・文学・アート～

那須塩原市の特徴のひとつとして、塩原・板室・三斗小屋の温泉群と山岳信仰の歴史があります。

塩原温泉は、大同元年（806）に発見されたと伝えられ、塩原十一湯と呼ばれる泉質の違う温泉地が連なり、近世初頭より湯治場として栄えてきました。明治に入り三島通庸の塩原新道開削により交通の便が良くなると、皇族をはじめとする名士や文化人、そして、近代文学のリーダーたちがこぞって訪れ、独特の文化的発展を遂げました。

板室温泉は、那珂川支流の湯川に沿う形で形作られた湯治場ですが、元禄8年（1695）の会津中街道開削により宿場町として栄えました。同じく三斗小屋にも温泉が湧出し、白湯山信仰と相まって賑わいを見せました。

白湯山信仰に見られる修験道の影響は、黒滝山信仰、嶽山信仰として山岳部に広まり、明治に至るまで隆盛を見せましたが、近年衰退し、今は名残をとどめるのみです。

これら山間部において培われた歴史や文化は、平野部の歴史とは異なる那須塩原市のもう一つの側面であり、本市の歴史文化の多様性と魅力を物語るものです。

### ●1200年の歴史を有する塩原温泉

塩原温泉地区は、市内西部の山間地の箒川上流域に位置し、塩原盆地を中心とした塩原温泉街を擁することで広く知られています。地区の中心である塩原温泉は、日光国立公園に含まれます。近世初頭の元湯は湯宿 37 軒となり「湯本千軒」と呼ばれるほどに興隆しました。また、下塩原では、江戸時代の安永4年(1775)に5,000人を超す入湯者があったという記録があります。明治時代になると、栃木県令三島通庸が行った塩原新道の開削により、交通の便が格段に良くなり、その後は政治家や名士がこぞって来塩し、別荘を設けるなどしました。歴史的には、地震災害などにより中心地の変遷がありました。温泉を巡る数々の歴史が現在の姿を形作ってきました。

平安時代の大同元年(806)に発見されたと伝えられる塩原温泉は、地区ごとに泉質も異なり、箒川の溪谷に沿って11の温泉地が連なり、「塩原温泉十一湯」と呼ばれてきました。

### ●板室温泉と三斗小屋温泉

板室温泉は、康平2年(1059)那須三郎宗重が発見したと伝えられる、那珂川支流の湯川沿いの山峡に開けた湯治場です。塩沢(温泉)とも呼ばれ、昭和45年(1970)には「国民保養温泉地」に指定されています。

三斗小屋温泉は、康治元年(1143)奥州信夫郡信夫村の生島某の発見によると伝えられ、朝日岳西側の山腹標高1,500メートルの高地に位置しています。谷を約3キロメートル下ったところに会津中街道の三斗小屋宿があり、白湯山信仰による参詣者の湯宿としても重要であったため、明治初年までは大いに賑わいを見せましたが、現在2軒の湯宿が残るのみです。

近世から近代に至る温泉がもたらした歴史や文化の豊富な記録・古文書が、市内各地に残されています。

分野	名称
指定文化財	塩原温泉元湯古絵図・板室温泉「温泉記」・板室温泉の湯本道標 加登屋旅館本館・加登屋旅館別館・加登屋旅館悠仙閣

## ●山岳信仰～白湯山・黒滝山・嶽山～

### 白湯山信仰

白湯山(「はくゆさん」または「はくとうさん」)信仰は17世紀後半に羽黒修験の影響下で成立したと言われます。

白湯山は、茶臼岳西側下方八合目付近の温泉の涌出源で“御宝前の滝”とも称し、江戸時代から昭和初期に至る長い間、修験者による山岳宗教の霊場となっていた所です。

白湯山とは、旧会津中街道三斗小屋宿からの登拝名で、那須湯本温泉からの登拝名は「高湯山」と呼ばれます。三斗小屋宿は白湯山信仰の隆盛に伴い門前町として栄え、信者によって寄進された石灯籠や石仏などが現在も残っています。



三斗小屋に残る石灯籠と石仏

分野	名称
指定文化財	三斗小屋宿跡・板室本村の大日如来座像
未指定文化財	「白湯山」碑

### 黒滝山信仰

黒滝山信仰は、明和9年(1772)5月に百村(旧黒磯市百村)内の地藏院・光徳寺・光雲寺・光照寺の4寺院から寺社奉行所宛てに開山願いが提出されていることから、これ以降の開山であったと考えられています。文化・文政期に最も活発となったと考えられていますが、現在は行われていません。

鳴内の大日如来を起点として、大蛇尾川上流の黒滝山頂まで2日を要し、24の札所をまわり、札所は滝や奇岩・大岩などを行場として、険しい山中に挑む登拝であったと知られています。近隣の村々をはじめ、江戸や仙台などからの寄進も見られます。

旧暦4月8日に山開き、同8月8日山止め、登拝期間は白湯山と同様であり、拝所名など類似点の多さが指摘されています。



黒滝山大日尊



## ■黒滝山信仰ルート



※国土地理院地図を利用し作成

- 黒滝山二十四礼拝所  
黒滝権現市解説板より
- | 番号 | 名称          |
|----|-------------|
| 1  | 荒沢大聖不動尊・大日尊 |
| 2  | 弁財天         |
| 3  | 両部曼陀良石      |
| 4  | 左御久良伎山神     |
| 5  | 御水神山        |
| 6  | 岩谷観音(後天子)   |
| 7  | 役乃行者        |
| 8  | 古倉山(前天子)    |
| 9  | 地藏尊         |
| 10 | 両部滝         |
| 11 | 弘法大師護摩石雷光の滝 |
| 12 | 天登大日山       |
| 13 | 雷光滝(一の滝)    |
| 14 | 推量権現(二の滝)   |
| 15 | 八万八千仏(賽の河原) |
| 16 | 御宝前         |
| 17 | 御裏三宝公神      |
| 18 | (欠所)        |
| 19 | 雷風二神        |
| 20 | 天狗岩窟        |
| 21 | 母の胎内潜り      |
| 22 | 薬師岳         |
| 23 | 五百羅漢        |
| 24 | 四天王         |

分野	名称
指定文化財	黒滝山大日尊
未指定文化財	24 か所礼拝所

## 嶽山信仰

高原山は、那須塩原市・日光市・塩谷町・矢板市にその山体が広がり、分水嶺によって行政界を成しています。『下野風土記』に「塩谷郡大山也、東嶽、中嶽、西嶽ノ三所ニシテ一山也。東嶽ハ那須郡ニマタガル。」とあり、それぞれ、釈迦ヶ嶽(東嶽)(1,795m)、鶏頂山(1,765m)中岳(1,728m)、月山(西平岳)(1,712m)と呼ばれています。高原山は奈良時代より山岳信仰の山として栄え、嶽山修験とも呼ばれました。高原山下、箒川、赤川の滝などで修業を行い、根本道場の一つとして塩谷地内の吉野大行院温泉寺などが知られています。塩谷院の末流としての大行院があり、現在は高原山神社(旧高原山社大権現)が祀られています。現行の主祭神は大国主命・事代主命・月読命となっています。



嶽山箒根神社奥の院



嶽山箒根神社奥の院(本殿)



嶽山箒根神社高清水

分野	名称
指定文化財	嶽山箒根神社奥の院(本殿・他2社)・嶽山箒根神社高清水(遥拝殿) 上塩原箒根神社社殿・金沢箒根神社(本殿) 嶽山箒根神社梵天上げ・嶽山箒根神社の大杉

## ●温泉神社・湯泉神社

温泉神社は、那須地域を代表する神社であり、本市の特徴を示すものとしても重要です。市内では、建造物として指定している神社が塩原温泉に5社、板室温泉と三斗小屋温泉に1社ずつありますが、指定文化財以外にも、村社として祀られてきた温泉神社が多数あり、旧黒磯市地区や旧西那須野町地区にも広がっています。

温泉地区にある神社は、宿場の繁栄と旅人の安全を守り、病を除くところとして古くから崇められ、現在に至っています。

分野	名称
指定文化財	板室温泉神社本殿・三斗小屋温泉神社本殿・新湯温泉神社・畑下温泉神社・塩の湯温泉神社・茗荷温泉神社・福渡温泉神社・温泉神社石幢
未指定文化財	塩釜温泉神社

## ●温泉と芸術～文豪と美術家～

江戸時代の古文書によれば、塩原に入湯のために訪れた藩主などは、宇都宮藩主をはじめ烏山藩主、黒羽藩主、喜連川公、佐久山公などが知られています。なかでも、天保6年(1835)「宇都宮 戸田因幡守様 御入湯控帳」に記録されている一行は170名という大規模なものでした。このほかに、主に水戸などの儒学者をはじめ多くの人々が来訪し、後に「紀行文」などを著わしています。こうした記録は本市の往時の様子がわかる貴重な史料となっています。

明治時代になると、交通の便が格段に良くなり、華族をはじめ文学者や美術家などが多く来訪するようになりました。明治21年(1888)に畑下に別荘を構えた奥蘭田は、塩原の名勝地を探り、風俗、古跡、伝説、温泉等を紹介した『塩溪紀勝』を記しました。尾崎紅葉は、明治32年(1899)に塩原を訪れ『続々金色夜叉』を執筆しました。同書の中に塩原の景色が描かれています。奥蘭田と尾崎紅葉は、塩原新道を開削した三島通庸と並び塩原の三恩人と称えられています。その他にも、夏目漱石、国木田独歩、田山花袋、森田草平、徳富蘆花、斎藤茂吉、与謝野鉄幹・晶子など多くの文人が訪れています。

大正時代には、幼少期や戦時中を塩原温泉で過ごした川瀬巴水が、塩原を題材にした版画でデビューしています。

分野	名称
未指定文化財	塩原を題材とした文学作品・川瀬巴水作品・文学碑・記念碑

### 戦時疎開のために来訪滞在した児童・生徒たち

塩原を訪れた多くの文人・芸術家など保養を目的とした人々のほか、忘れてならない事実には太平洋戦争下で行われた学童の集団疎開があります。県内では東京の港区・文京区・新宿区などから16,000人に近い学童の集団疎開を受け入れ、このうち塩原温泉地区の温泉旅館には、女子学習院生徒(初等科4年から中等科2年及び皇女を含む)212人をはじめ、4,000名を超える児童・関係者が滞在したといわれます。



明賀屋太古館

### ロイヤルリゾート

明治35年(1902)皇太子嘉仁親王(後の大正天皇)が塩原に行啓されました。その翌年、再び塩原に行啓され、その時三島家の別荘にひと夏滞在されました。これを大変な名誉とした三島家から皇室に別荘が献上されたのは明治36年(1903)のことです。この別荘が塩原御用邸の前身となりました。

御用邸の誕生が、塩原をロイヤルリゾートへと押し上げ、これに倣うかのように、多くの著名人の別荘が建ち並ぶこととなります。

塩原御用邸は昭和21年(1946)に廃止されましたが、旧御用邸の新御座所は移築され、天皇の間記念公園として公開されています。

分野	名称
指定文化財	旧塩原御用邸新御座所・品川弥二郎の旧念仏庵
未指定文化財	明賀屋太古館・塩原温泉祭り